

上ノ段遺跡

—— 平成3年度県営圃場整備事業柏原地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1992

茅野市教育委員会

序 文

上ノ段遺跡は縄文時代後期から晩期に亘る遺跡として昭和初期より幾度もの調査・研究がなされてきました。特に宮坂英弼先生による一連の調査で、遺跡の内容の一端が判明し、中部高地における縄文時代後期・晩期を代表する典型的な遺跡であり、学術上に貴重であることより昭和17年に国史跡に指定されました。以来今日まで、地元の方々のご理解と協力により現状のまま大切に保存されてきました。

今回県営圃場整備事業柏原地区に伴い、記録保存を前提に史跡範囲外の緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施しました。その結果縄文時代後期から平安時代の遺構が確認され、その一部は関係機関・地元地権者のご努力により設計変更がなされ、埋没保存されることになりました。

発掘調査では縄文時代前期末の竪穴住居址、後期前半の柄鏡形住居址、方形柱穴列の調査が行われ、その結果後期前半集落の様相の一部が解明でき改めて本遺跡の持つ重要性を認識し直しました。

今回の発掘調査により得られた資料は今後史跡を活用、研究する上にも重要なものとなることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成4年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角昭二

目 次

序 文	第III章 発掘された遺構と遺物	6
第I章 遺跡の環境	第1節 遺跡の層序	6
第1節 遺跡の位置と環境	第2節 発掘された遺構	7
第2節 上ノ段遺跡周辺の遺跡	第3節 発掘された遺物	16
第II章 発掘調査の概要	第IV章 結 語	17
第1節 発掘調査の経過	図 版	

第 I 章 遺跡の環境

第 1 節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 上ノ段遺跡は茅野市北山湯川地区に所在する。市街地の北東 9 km に位置する。ちょうど湯川地区の集落北側に位置している。この一帯は八子ヶ峰の山脚と、霧ヶ峰山塊の支峰である朝倉山に挟まれた位置に形成された扇状地形の端部に位置する。

2. 遺跡の地理的環境 この扇状地形は、八子ヶ峰山麓より深い谷状地形を呈し流下する蓮井沢川と、モチグリ沢川により形成されたもので、扇頂部を柏原地区に、扇端部を湯川地区の北側まで至り沖積地を挟んでここで八ヶ岳山麓台地と接する。霧ヶ峰、車山南麓には各所に小扇状地が形成されているが、本遺跡の立地する扇状地は最大規模を誇っている。

扇状地の西端、霧ヶ峰山塊と接する部分は、白樺湖を水源とする音無川が流れ、東端八子ヶ峰山麓と接する部分には蓮井沢川が流れ、遺跡の南裾に沿って追出川が流れる。この追出川の水源は遺跡の南東側約 200 m の八子ヶ峰山塊の山裾より湧出しており、その量は豊かで年間を通し安定した水量を誇っている。これらの河川には現在でも溪流魚が繁殖しており、追出川などは産卵のために溪流魚が遡上してきている。護岸工事等が行われなかった頃は魚影の濃い水系であったことが想像できる。

上ノ段遺跡の立地する部分は扇状地と沖積地とが接する端部がやや小高くなり尾根状を呈している箇所、標高は 975 m を測り、割合平坦な沖積地に立地する湯川地区との比高差は約 5 m を測る。

遺跡の立地する扇状地形は、ちょうど八ヶ岳山麓より音無川の渓谷を遡り大門峠、雨境峠等を経て東信地区へ通じる街道の口元に当り、この大門街道は古くより重要な交通路として利用されたことが知られており、古代に於いては古東山道、中世では所謂信玄の棒道などが遺跡付近を通過していたとされている。また、音無川を遡行し、車山山腹へ抜け霧ヶ峰に至るルートは、黒曜石原産地である和田峠付近への黒曜石運搬に関わるルートとも考えられており、本遺跡はそのようなルート上にあり、黒曜石の交易を考える上にも重要な位置に立地している。

3. 遺跡調査の歴史 上ノ段遺跡は古くより多くの黒曜石や石鏃が多量に採集できる遺跡として知られており、大正年間から昭和初期にかけて地元研究者である田實文郎氏や小平雪人氏が盛んに表面採集を行っている。昭和 4 年には八ヶ岳山麓の考古学調査に訪れた伏見宮の調査も行われている。昭和 10 年以降宮坂英弐氏が数回に亘る発掘調査を行っている。^(註 2・3) 調査の概略は次の通りである。

昭和 10 年 11 月、農道南側の畑で試掘調査を実施。縄文時代後期、晩期の土器片を得る。

昭和 11 年 6 月、農道北側の畑地を調査し、敷石住居址に伴う方形石囲い炉址を検出している。

この調査により縄文時代前期以降の各期に亘る遺物が採集され、本遺跡が長期に亘る複合遺跡であることが判明した。この際に遺物包含層より採集された宋銭（宜和通寶）は、当時縄文時代の下限についての論争（ミネルヴァ論争）の一資料とし学会へ波紋を投げかけた。

昭和13年に第3次調査が行われ、縄文時代後期から晩期に亘る良好な資料が得られている。

昭和16年9月に第4次調査が行われ、縄文時代中期後半と思われる方形の石囲い炉を持つ竪穴住居址と、2×2.5mの楕円形を呈する住居（後期末から晩期前半）が検出されている。この住居址の炉址は径50cmの方形石囲い炉をもつ。この住居址に重複するように、方形の配列を持つ6ヶ所の柱穴が検出されているが、その規模、配列のあり方等を考えると方形柱穴列の可能性が考えられて^(註4)いる。この調査により多量の縄文時代後期、晩期の土器、土製品等が出土している。

以上の調査により上ノ段遺跡が縄文時代後期、晩期の良好な資料を包含する指標的な遺跡とし、昭和17年10月14日付で国史跡に指定されている。

第2節 上ノ段遺跡周辺の遺跡

上ノ段遺跡の立地する扇状地付近に立地する遺跡についての概要を『茅野市史』上巻に沿って記述する。

キツネ原遺跡 上ノ段遺跡の立地する扇状地の扇頂部に近い部分に位置している。標高は1060mを測り、モチグリ川により形成されたとと思われるやや小高くなった部分に遺跡が立地しており、部分的に河川の氾濫により押し流されてきたと思われる巨石が点在している。遺跡の内容は不明であるが、縄文時代中期中葉勝坂式土器や黒曜石剥片、中世内耳土器片等が採集されている。

矢ノ口遺跡 八子ヶ峰山裾の一部が小規模な崖錐状の地形を呈し、この部分に遺跡が立地する。昭和61年に県営圃場整備事業湯川地区に伴いその一部が発掘調査され、谷状地形と縄文時代前期末、中期後半の若干の遺物が検出され、遺跡の南限が把握された。また、昭和13年の開田により土師器、須恵器を伴う平安時代の竪穴住居址が検出されたことが宮坂英弐氏により報告^(註1)されている。この地点を特定することはできないが、遺跡の中心は追出川の水源に近い斜面部と思われ、蓮井沢川をはさみ本遺跡と対峙するものであ^(註5)らう。

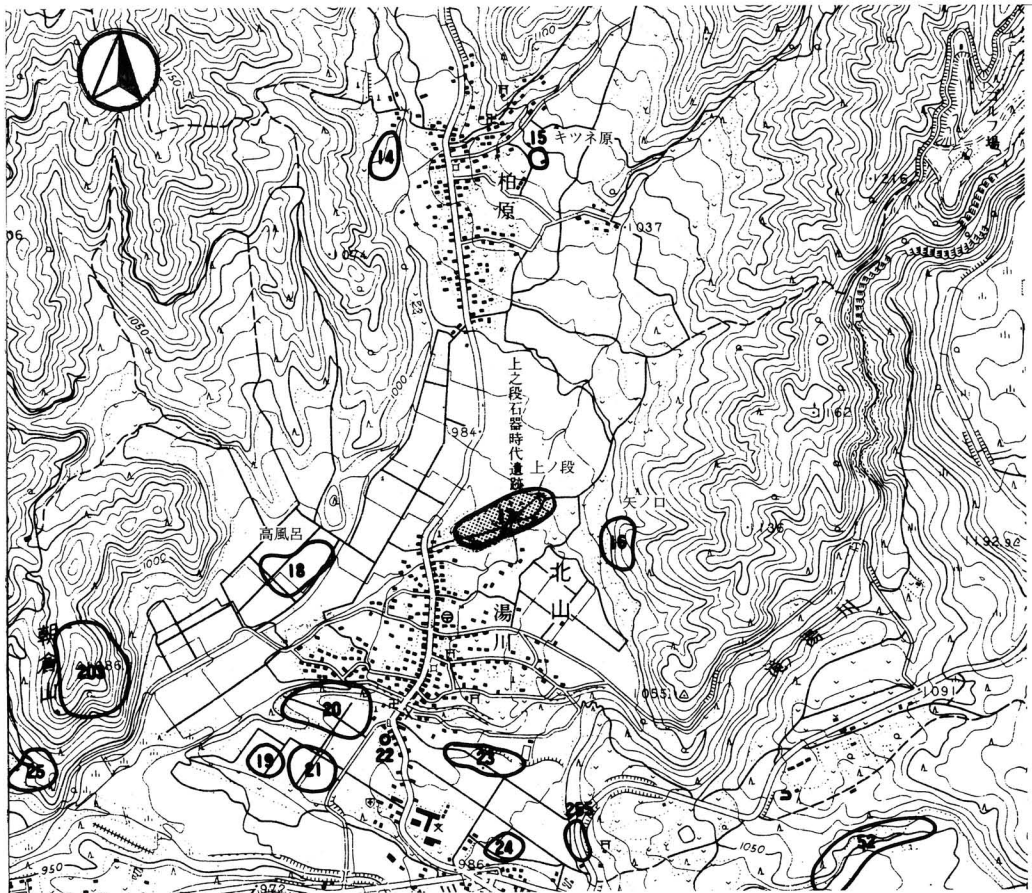
高風呂遺跡 音無川西岸に霧ヶ峰山塊の一部が残丘状の尾根状台地が延びており、遺跡はここに立地していたが、圃場整備事業のために削平され、その面影はない。

昭和59年県営圃場整備事業湯川地区の施工に伴い記録保存のための調査が行われ、縄文時代早期末から中期に亘る継続的な集落址が検出されている。

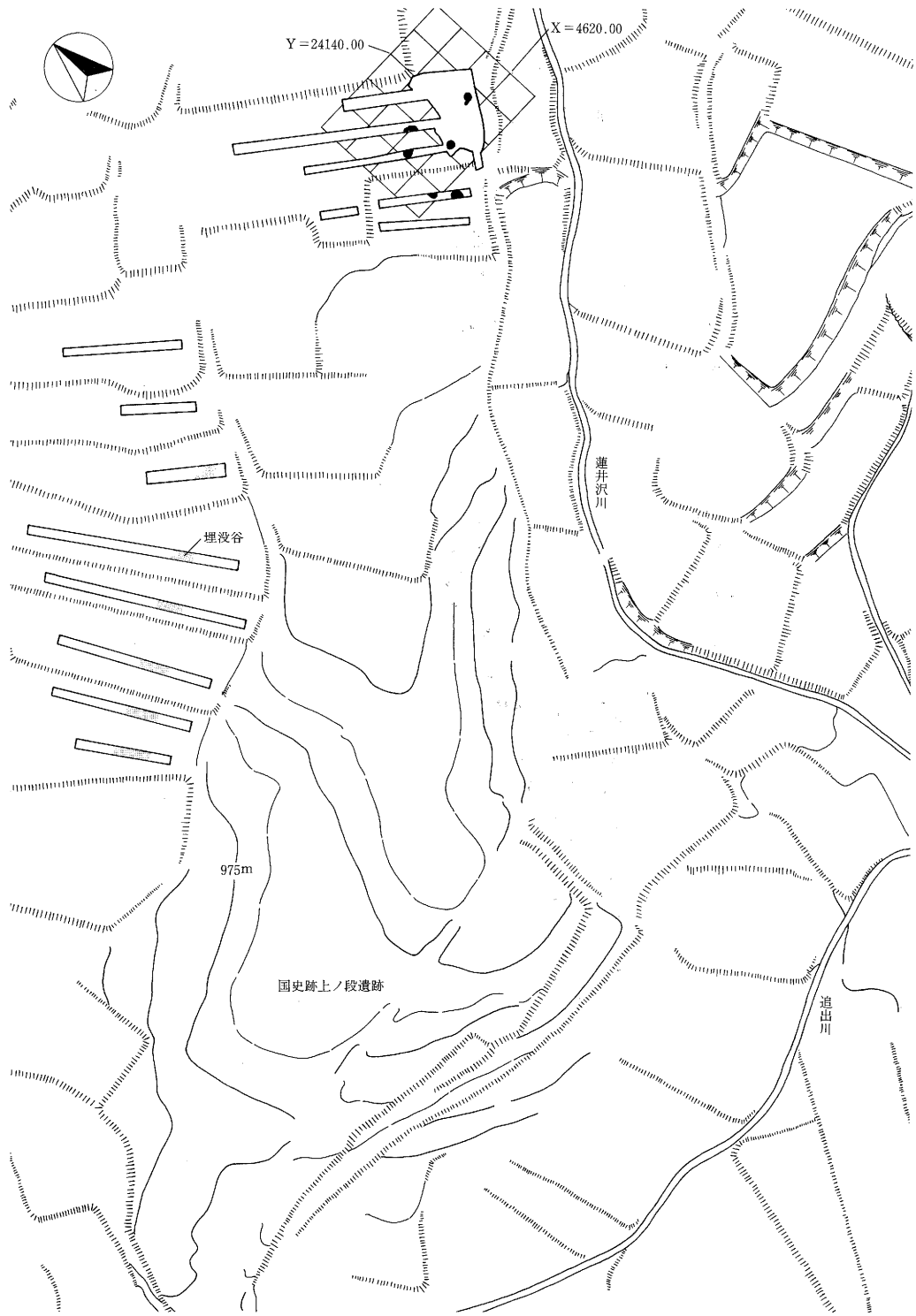
検出された遺構の内訳は縄文時代竪穴住居址、早期末3、前期初頭14、前期前半7、前期中葉5、前期末5、中期初頭1、中期中葉5、中期後葉6、不明5、前期初頭の集石遺構4、前期前半の方形配列土坑1、前期の土壙群、早期末から前期中葉を中心に規模の大きな集落が形成されていたことが判明した。黒曜石製の石器、剥片が大量に出土し、また、東海系の土器群や、東信地区などに分布圏を持つ「中道式」の土器群が出土しており、黒曜石を媒体とした文物の交流を

窺い知ることができた。^(註6)

- (註1) 宮坂英弼 1939 「長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡発掘に依る縄文弥生両文化接触に関する一資料」『歴史地理』73-5
- (註2) 宮坂英弼 1940 「北山浦地方石器時代の文化(一)(二)(三)-上ノ段遺跡の調査-」『郷土』2-9・10・11
- (註3) 宮坂英弼 1942 「長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡発掘報告」『史前学雑誌』14-1
- (註4) 鶴飼幸雄 1983 「上ノ段遺跡」『長野県史 考古資料編』1巻3
- (註5) 茅野市教育委員会 1986 『矢ノ口遺跡』
- (註6) 茅野市教育委員会 1986 『高風呂遺跡』



第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 調査区周辺の地形 (1/2,000)

第II章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経過 上ノ段遺跡周辺に圃場整備事業が実施され始めたのは昭和59年からの県営圃場整備事業湯川地区で、その際は遺跡の周辺は計画から除外されて事業が進行した。

平成2年に入り新たに県営圃場整備事業柏原地区が計画された。5月に茅野市教育委員会が実施した平成3年度に係る埋蔵文化財の実態調査についてにより、県営圃場整備事業柏原地区の計画の詳細が判明した。それによると、事業対象となる地区は国史跡範囲を除いた遺跡と接する畑、水田全域であった。上ノ段遺跡の立地する扇状地はその特性より遺跡の限界を地形的に見出すことが困難で史跡範囲外に、遺構・遺物が埋蔵する可能性が充分考えられたために、何らかの対応をする必要性が生じた。これを受け平成2年8月20日付2教文130号平成3年度の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財の保護協議について（通知）が長野県教育委員会より提出され、8月31日に長野県教育委員会児玉卓文指導主事、市澤英利指導主事、諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会生涯学習課で協議が持たれた。その結果、遺跡の範囲確認を主眼に置いた調査が必要で、遺構等の確認された場合は、国史跡の隣接地であることなどを鑑み、設計変更等による遺構の保存が望ましいという協議結果となった。10月4日に再度4者により調整が行われ、その結果平成3年度事業として補助金計画を上げることとなった。11月1日地元柏原地区に於いての県営圃場整備事業柏原地区合同委員会で、調査概要の説明を行い、調査対象地区についての休耕依頼をした。以上の協議の結果を踏まえ平成2年12月10日付2教文第7-8-10号上ノ段遺跡の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると、遺跡の保護については、発掘調査による記録保存とし、発掘調査経費は諏訪地方事務所の負担とするが、農家負担額については文化財側で負担し、調査の実施は茅野市教育委員会に委託するというものであった。発掘計画書によると1846㎡以上を発掘対象とし、その経費総額は66290000円であった。この計画を受け茅野市教育委員会では平成3年度文化財関係補助事業計画を上げ事業に備えた。

平成3年5月15日付3諏地土第91号をもって「埋蔵文化財包蔵地発掘委託契約書」を取り交わし業務に入った。現場に於ける調査は5月20日より開始し、調査計画に沿ってトレンチを設定し調査を行い、遺構の範囲と遺物の包含状況の確認、遺構の時期、開田以前の旧地形を把握することができた。この成果に基づき6月5日現地において長野県教育委員会市澤英利指導主事、諏訪地方事務所土地改良課、長野県土地改良事業団体連合会、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室で再協議が行われた。その結果圃場施工に伴い構造物（水路）により削り取られる部分の記録保存調査が必要で、他の部分については水田面の調整により埋蔵物に影響を与え

ないようにする。調査の終了期限を工期との関連より9月末とする。調査方法、区域の変更による発掘計画、予算の見直しを行う。等の確認がなされた。8月13日付2教文第7-81-10号で再度県営圃場整備事業（柏原地区）にかかわる上ノ段遺跡の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出され、これに基づき8月26日より発掘調査に入った。

調査組織 団長 両角昭二 調査員 鶴飼幸雄 小林深志 守矢昌文（現場担当） 功刀 司 小池岳史 伊東みゆき（現場担当） 事務局 両角一夫 調査補助員 杉本裕子 発掘作業協力者 牛山市弥 牛山徳博 荻原伝一 金子清春 小平長茂 篠原 鼎 篠原婦美恵 両角清近 両角孝次 両角条一 両角みゑ 両角弥生 矢野聡美 吉田 勇

2. 発掘調査の経過 調査区の設定は地形の状況を把握するために尾根状台地を切る形でトレンチを設定した。尚、面的な調査を実施した部分についてはグリット方式とし、公共座標 $Y = -24140.00$ 、これに直行する $x = 4620.00$ を基準軸とし、この交点Aに標高980.868mの原点を置いた。Aの他にB～Eの4点を下記のように設置した。B $Y = -24140.00$ 、 $x = 4630.00$ C $Y = -24130.00$ 、 $x = 4630.00$ D $Y = -24140.00$ 、 $x = 4636.00$ E $Y = -24146.00$ 、 $x = 4620.00$

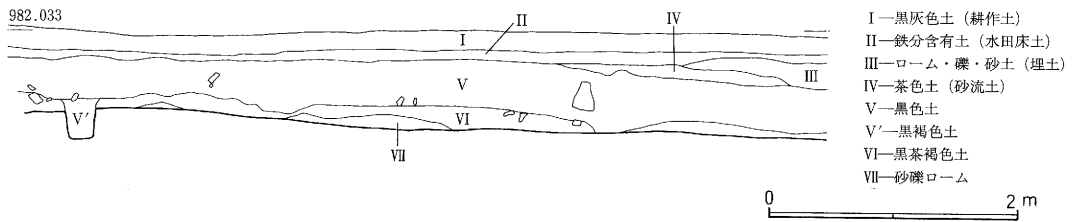
遺跡の範囲確認調査は5月20日から24日まで行われ、トレンチにより1412.5㎡が調査された。これにより国史跡の北側県道沿いの水田下は礫等の押し流された状況で、谷状地形が埋没していることが判明した。史跡範囲の北東側では水田面下80cm～110cmに遺構が確認された。6月5日の協議に基づき8月26日より本調査に入る。礫を多量に含む土層のため遺構確認に困難をきたした。また、深掘りに伴い遺構内より著しい湧水がみられ手間取る場面もあった。9月20日には降雨のため調査区の半分以上が水没し、水の汲み出しや泥の除去が大変であった。9月27日に全遺構の測量等を終了し調査を終了した。

遺物整理及び報告書作成が本格的に開始となったのは、他の発掘調査が終了した12月からである。報告書の作成は伊東、守矢が行い杉本が補助した。原稿の執筆は守矢が行い、報告書のページ数等の関係より代表的な遺構・遺物の概略を記述した。

第三章 発掘された遺構と遺物

第1節 遺跡の層序

上ノ段遺跡の立地する地形は前述したが、河川の押出しによる扇状地であり、地山は二次堆積による礫と砂状のローム層で、部分的に押出しに伴うと思われる旧河川の河床が検出できた。全体的に土層は礫や砂を含有するもので、この地が度重なる河川の氾濫に遭っていたことが窺える。昭和58年の災害時には遺跡脇を流れる蓮井沢川が氾濫し、周辺の水田等が水没し甚大な被害が出ている。



第3図 遺跡の基本的層序 (1/60)

調査区は水田として造成されているため、部分的に埋め土や、また、切り土がなされ水平な水田面が作られている。そのため旧地形を窺い知ることのできる箇所は少なく遺跡限界を把握することは難しかった。

遺跡が扇状地に立地する関係より時期別の生活面を把握することはできなかったが、縄文時代と平安時代の遺構覆土の色調には明らかな差が識別できた。平安時代のものは粘性のある漆黒に近い色調を呈する黒色土で礫の含有も少なく、縄文時代のものは黒茶褐色を呈する傾向にあり、やや砂状の感触のある部分もみられた。

I層～III層 現在の水田に関わる土層である。III層は地山層と思われる礫混入の砂状ロームを削り取って埋め土に用いている。

IV層 砂礫を大量に含む茶色の土層で、氾濫により堆積したものであろう。この土層は調査区全域に認められるのではなく部分的に堆積するものであろう。

V層 本層が遺物包含層で、平安時代、縄文時代の遺構がこの層より掘り込まれている筈であるが、V層を分層することはできなかった。

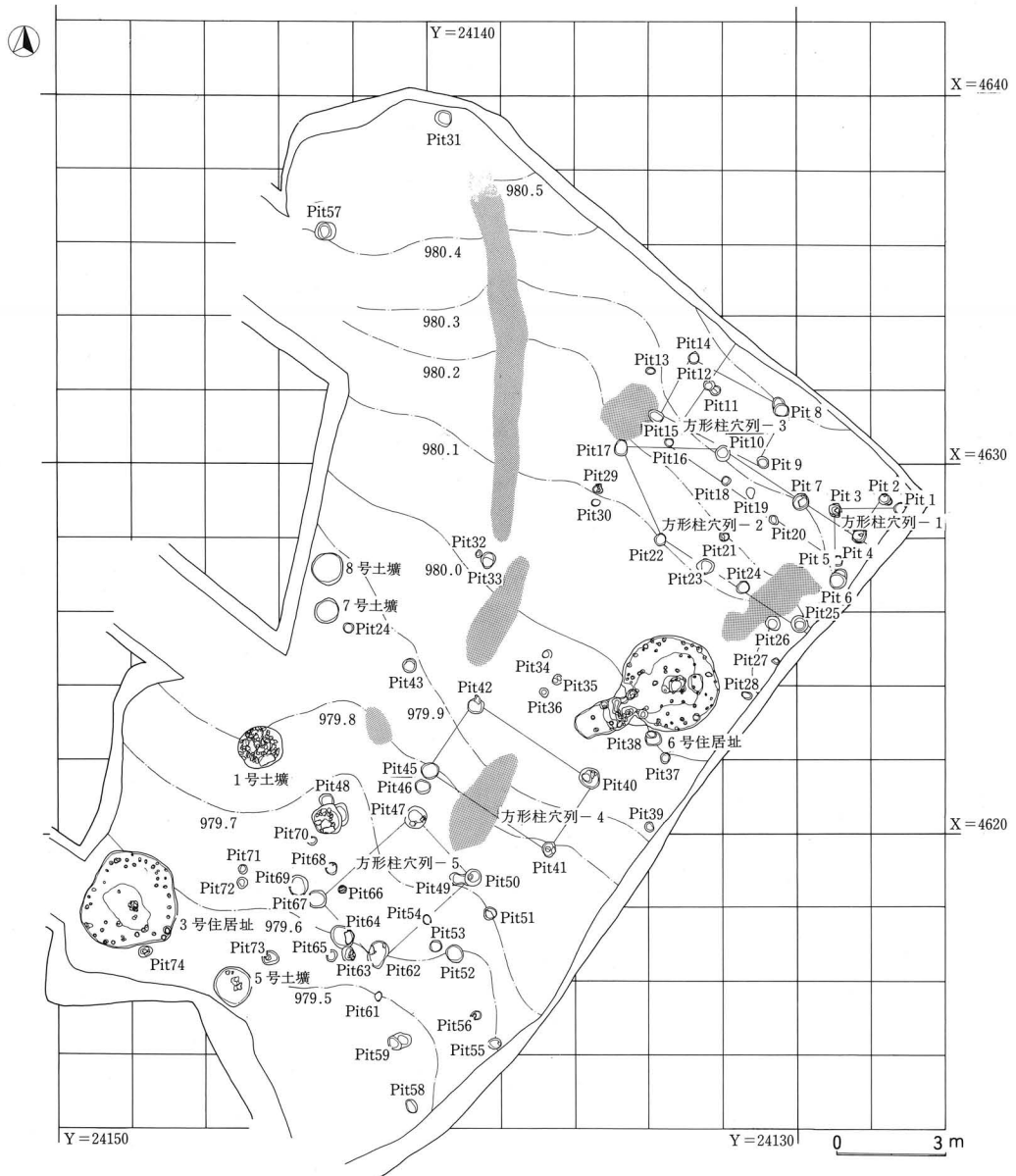
VI層 10cm大の礫を含む黒茶褐色で北東から南西方向へ緩やかな傾斜をもち堆積する。

第2節 発掘された遺構

1. 遺構の概要 試掘調査を含めて今回検出された遺構は竪穴住居址6（試掘時から通し番号で1号から7号と住居址番号を付けてきたが、5号については住居址でないことが明確になったため欠番とする）、土壇8、ピット状遺構73である。試掘調査に於いて土壇若しくはピット状遺構と思われる遺構が数基検出されているが、その正確が明確でなかったために番号を付けなかったものもある。本調査に於いて記録保存が行われた遺構は竪穴住居址2（3号、6号）、土壇5（1号、5号～8号）、ピット状遺構73（1号～73号）である。基本層序の部分でも触れたが、明確に層位により時期を判明し得た遺構はなかったが、伴出遺物等より縄文時代前期末、後期前半、平安時代のものであることが判明した。

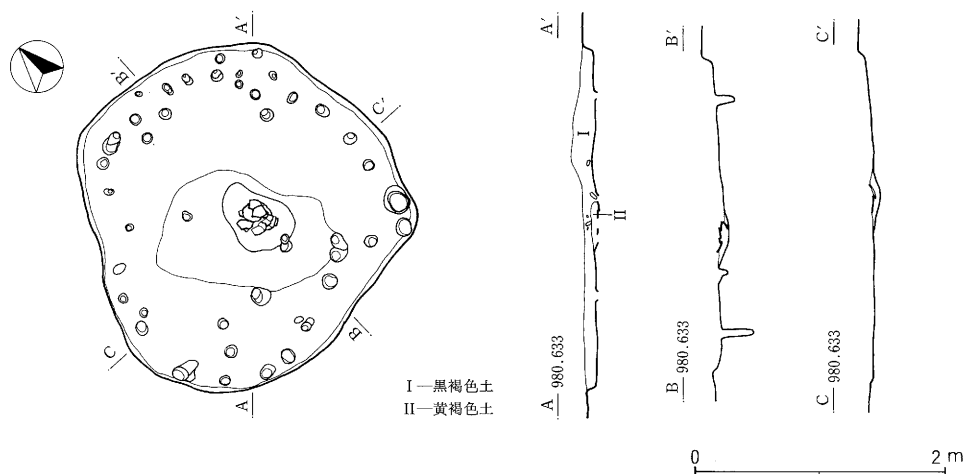
1. 竪穴住居址

1号、2号、4号、7号住居址は試掘の際に確認された住居址で、規模等は不明である。1号、2号は出土遺物、平面プラン等より平安時代に帰属することが判明しているが、他については不明である。



第4図 上ノ段遺跡調査区内遺構全体図 (1/200)

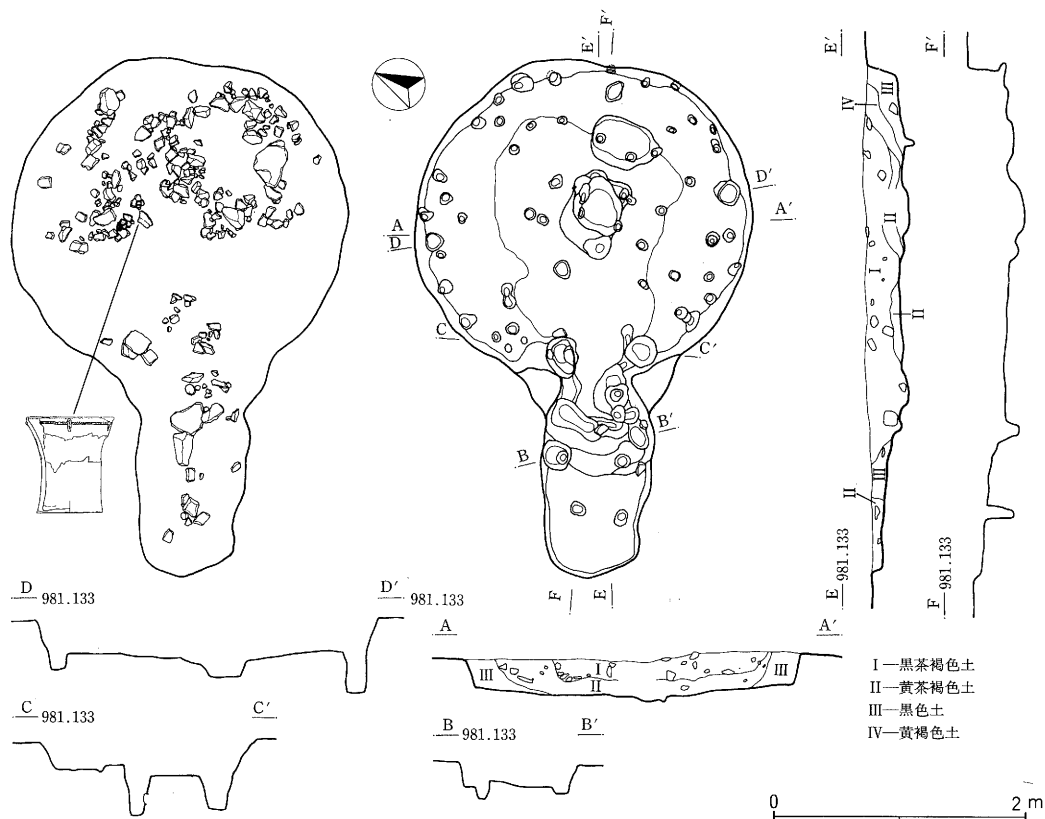
第3号住居址 (第5図) 調査区の西側に検出された住居である。平面形は北西、南東方向が張る隅丸5角形である。規模は2.8m×2.75mで、長軸方向はN-42°-Eを示す。壁の立上りは不明瞭で、特に南西側は緩やかな傾斜のために検出に苦慮した。最も高い部分で16cm前後である。壁際より約10cm前後離れた部分に不規則であるが径10cmの小孔が一重に巡っている。この小孔と同様なものが若干内帯にみられる。支柱穴と思われるような大型の柱穴は検出されず、小孔が上屋を支えていたものであろう。床は住居中央部に向かい緩やかな傾斜を持っている。中央部1.5m×



第5図 第3号住居址 (1/60)

0.9mの範囲に叩き締められた床が残存していたが、この外縁は軟弱であった。炉は住居のほぼ中央に不整形な径50cm～60cm、深さ7cmの浅い皿状の部分を利用したものと思われ、内部に深鉢形土器破片の裏面を出し敷き重ねてあった。土器器面に加熱によると思われるアバタ状の剥落が認められたが、掘り方内に焼土を検出することはできなかった。遺物は覆土内より土器片5、黒曜石剥片5、碎片1、炉内より深鉢形土器の一括が出土しているに過ぎない。本址は炉内の土器より縄文時代前期末に帰属するものであろう。

第6号住居址(第6図) 本址は調査区の東側に位置する。平面形は柄鏡形を呈している。規模は主体部で2.5m×2.65mで平面形は東西方向にやや押しつぶれたような円形プランを呈している。柄部は1.65m×0.9mの隅丸長方形を呈しているが、主体部と接続する部分は大きくくびれている。住居址の全長は4.15mで割合小型のものである。主体部の壁の立上りは東壁で27cm、北・南壁で22cmと南西方向へ地形に沿って徐々に低くなる傾向が窺える。壁の掘り方は明瞭で約70°の角度を持って立ち上がる。床は住居中央部に向かい緩やかな傾斜を持つ。炉を囲むように1.5m×1.8mの範囲が軟弱で皿状にくぼんでいるが、この外帯は礫混じりの地山を硬く叩き締めており堅緻であった。主体部の支柱穴は6ヶ所で、長軸方向の北東側と南西側に相對するように2ヶ所ずつ配され、短軸方向北西側と南西側に1ヶ所ずつ柱穴を配している。支柱穴に加え補助柱穴も認められる。支柱穴の深さは北東側では4cm～6cmと浅く、他の部分では27cm～32cmと割合しっかりしている。柄部にも主体部南西側の支柱穴と相對する位置に柱穴がみられる。柄部は半分より2段の構造を持っている。ちょうど主体部との接続部は皿状の掘り込みとなり内部の床と接する。この部分には浅い周溝が巡っており、これが出入口の何らかの施設に関わっていたものであろう。柄部に埋甕の施設は認められなかったが、20cm×30cm大、厚さ7cmの板状の礫が水平におかれ、これに長さ38cm、幅15cmの角柱状の礫が伴っていた。他にも10cm～15cm前後の礫が周辺に検出されているが、この2点はその配置より出入口に関わり設置された可能性が強い。炉は主体部のほ



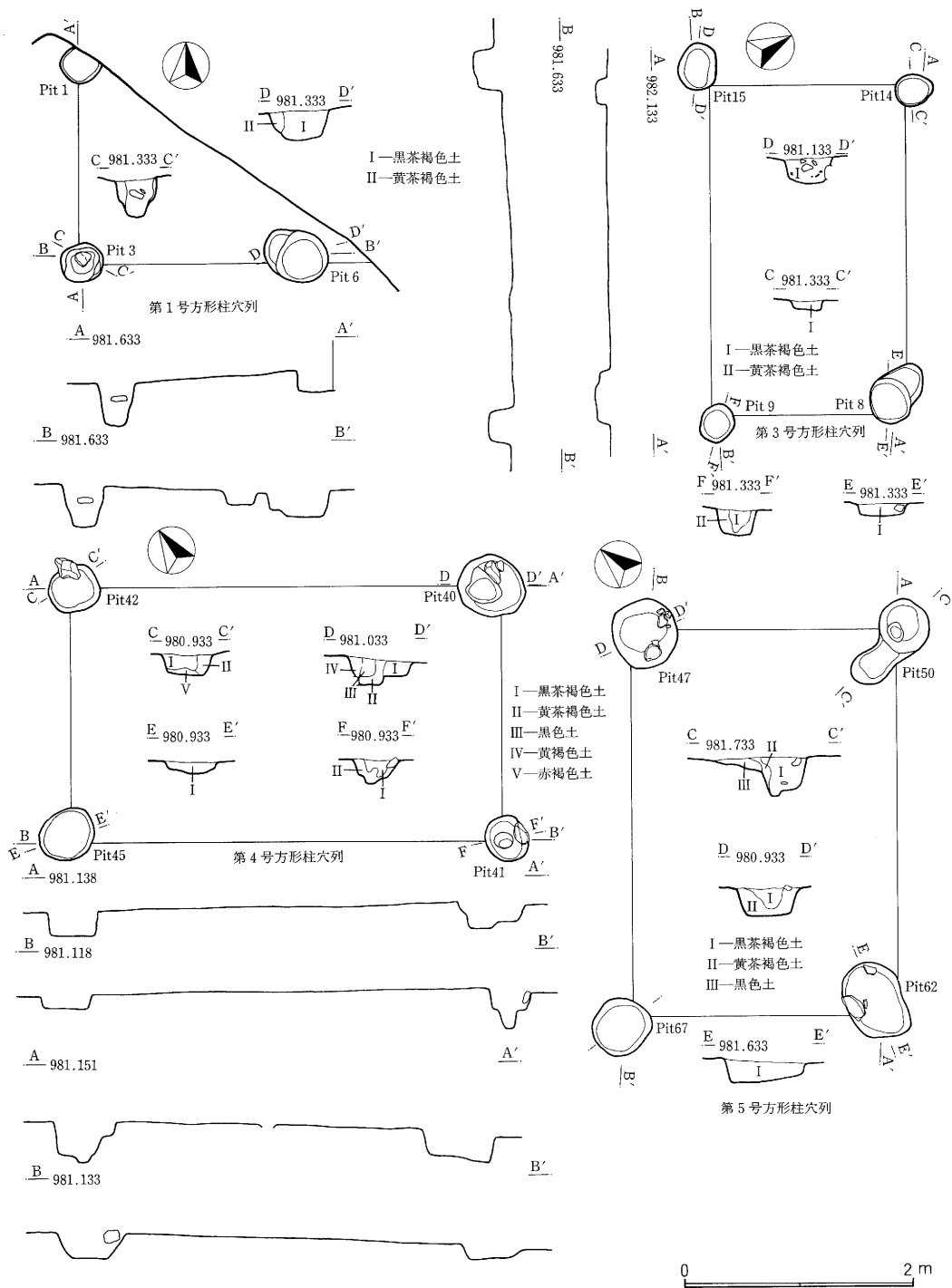
第6図 第6号住居址 (1/60)

ば中央長軸線上にその掘り方が検出された。炉石は抜き去られ遺存していなかった。

掘り方は南西側は緩やかで深さは15cmを測る。掘り方内北東側の壁際に薄く焼土が認められた。覆土は4層に分層できた。壁際に堆積していた黑色土(III層)を除き礫がI・II層に多数投げ込まれたような状況で検出されている。礫は遺跡周辺の河床礫で、その大きさは様々で40cm×35cmのものが最大である。礫の平面分布には偏りがみられ、主体部の北東側を中心に柄部との接続部に分布がみられる。礫に混在して逆位のつぶれた状態で深鉢形土器(第11図1)が出土している。礫は住居址廃絶後壁際に黑色土が、この上に流れ込みによると思われる砂状の黄褐色土が堆積し、皿状の窪地となった部分に人為的に礫やI・II層を埋め戻した可能性が強い。床面直上からの遺物の出土はなく全て覆土内からである。復原可能な深鉢形土器の他に、縄文時代後期と思われるもの20点、黒曜石剥片8点が出土している。深鉢形土器よりみて後期前半堀之内II式期に归属しよう。

2. 方形柱穴列址

調査区の全域に亘って柱穴状のピット73が検出された。これらの平面形状には円形、不正円形、楕円形等が認められ、不正円形で直径30cm~40cm、深さ15cm~20cm前後のものが主体を占める。積極的に柱痕と思われる土層の確認はされなかったが、黒茶褐色土が垂下するものや、3・4・

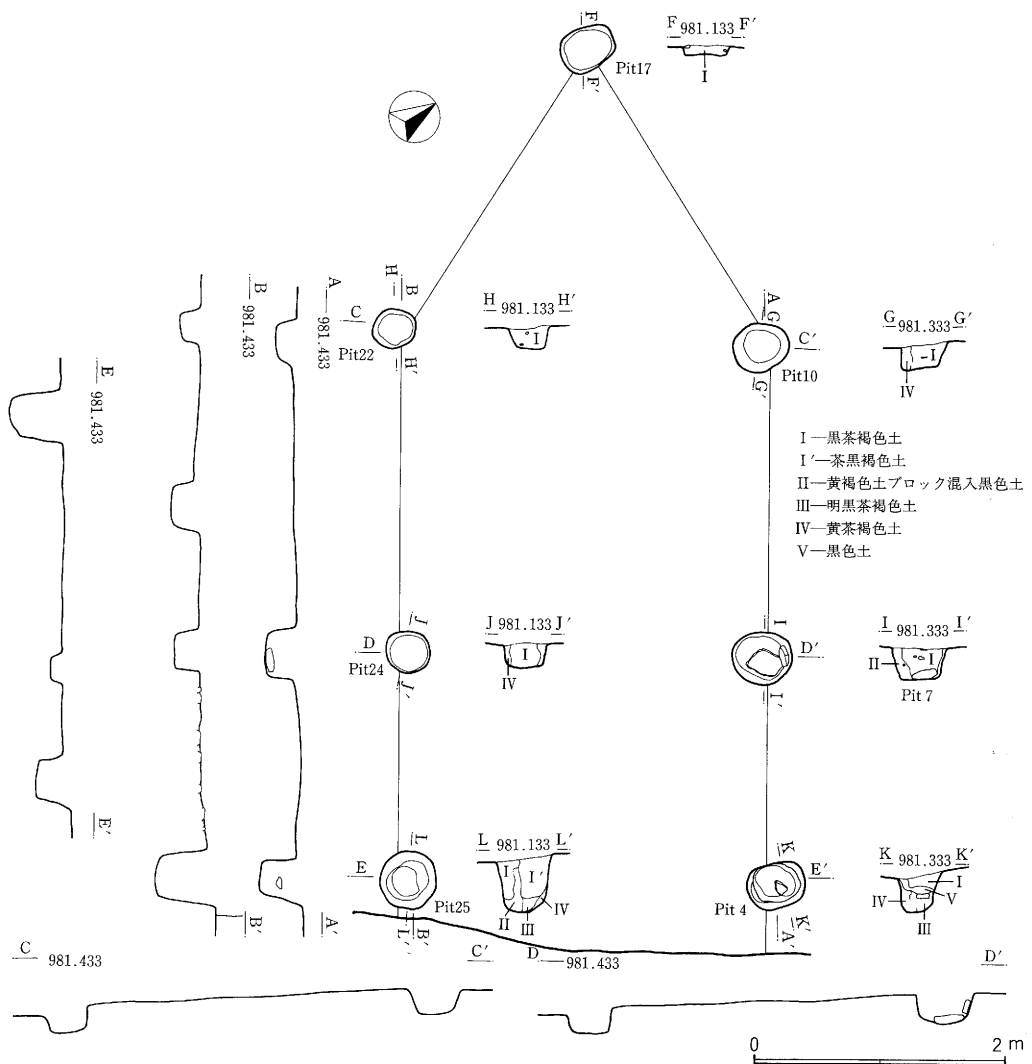


第7图 第1号·3号·4号·5号方形柱穴列 (1/60)

7号のように扁平な礫を礎板状に設置するものがあり、ピットが柱穴として用いられていたことが窺えた。これらのピットは調査の東側、南側の一部に偏在して検出され、また、直線的に並ぶものもあるため方形柱穴列となる可能性が強くその検出に努めた。

第1号方形柱穴列址（第7図） 調査区の西側より検出され、その大半を調査区西側を通る農道下となり、東側は2号方形柱穴列、1号建物址と重複関係にある。遺構の大半が調査区外であるために規模等は不明である。本址を構成するピットは1・3・6号の3ヶ所で径35cm前後深さ19cmから36cmで割合ばらつきがある。最も深い3号の場合検出面下15cmの位置に礎板と思われる礫を据え深さの調整を行っている。本址に直接伴うかは不明であるが、6号ピット埋土より縄文時代後期と思われる土器片1、黒曜石剥片1が出土している。

第2号方形柱穴列址（第8図） 1号方形柱穴列と同様に調査区西側に位置し、1・3号方形



第8図 第2号方形柱穴列 (1/60)

柱穴列、1号建物と重複関係を持つ。遺構の南東側は調査区外であるために規模等は不明である。本址は4・7・10・22・24・25号ピットより構成され、長軸方向はN-56°-Wをさす。長軸方向に張り出しを持つ六角形の平面プランを呈する。北東辺と南西辺の距離は2.85mで大きな歪みはないが、10-7(2.5m)、7-4(1.8m)と10-7が70cmほど長い。本址を構成するピットの平均は41.5cmで、深さの平均も21.7cmと他の方形柱穴列と比較するとしっかりしている。また、ピットの構成も4・7号のように礎板と思われるような礫を設置し丹念な作り方をしている。本址を構成するピット内より後期粗製土器片と堀之内式に比定できる条線文土器、黒曜石剥片が出土している。本址は出土遺物等より後期前半に帰属するものであろう。

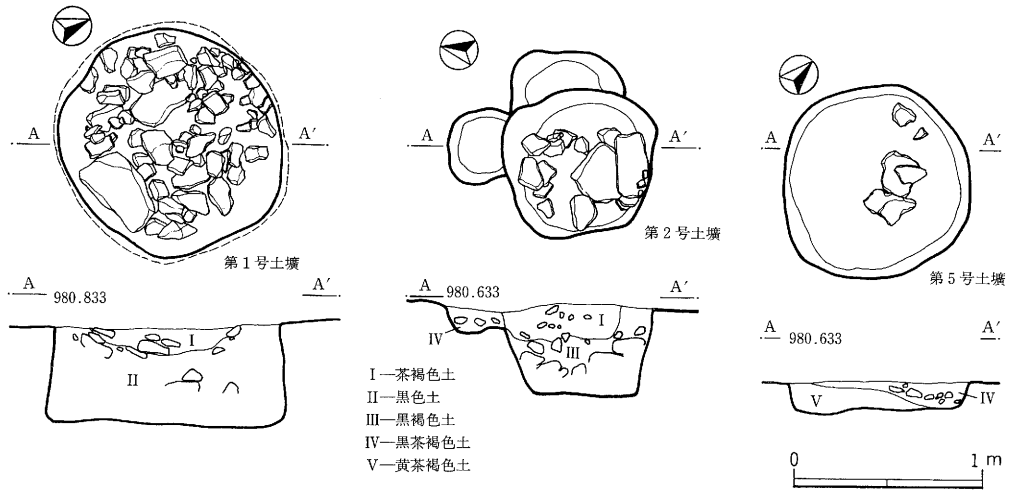
第3号方形柱穴列址(第7図) 1・2号方形柱穴列と同様に調査区の西側に検出された。本址を構成するピットは8・9・14・15号の4ヶ所で、平面プランは不正形な長方形を呈する。北西方向に長軸を持ち、長軸方向はN-63°-Wをさす。短辺である北西辺は1.9m、南東辺は1.5m、長辺である北東辺は2.75m、南西辺は3.1mを測り、短辺には大きな差がないものの、長辺では35cmほど南西辺が長く平面形に影響を与えている。面積は約5㎡を測る。ピットの平均的な深さは18.75cmで、南西辺に位置するものの方が北東辺のものに比べ深い傾向が見られる。本址を構成する15号より後期堀之内式に比定できる条線文土器が2、他1が出土しており、本址は後期前半に帰属するものであろう。

第4号方形柱穴列址(第7図) 本址は図面整理の段階でその存在が明確になった。6号住居址の南西側に位置し、40・41・42・45号ピットより構成され、平面プランが長方形を呈する。北西方向に長軸をもち、長軸方向はN-58°-Wをさす。短辺である北西辺、南東辺の差は5cm程度で、平均は2.225mを測る。長辺は北東辺が3.65m、南西辺が3.8mを測り、15cm南西辺が長いそのため平面形がやや歪む結果となっている。本址を構成するピットは径40cmを平均とし深さも浅い45号(12cm)を除くとほぼ20cm前後の深さを持つ。40・41・42号ピットには根固め用と思われる礫が掘り方際に添えてある。また、40号などは2段構造の掘り方を持つ。40・41号より土器片が出土しているが時期を特定することはできない。しかし、遺構の状況等を考慮すると後期に帰属するものであろう。

5号方形柱穴列址(第7図) 本址は4号方形柱穴列の南西側に位置し、図面整理の段階でその存在が明確となった47・50・62・67号ピット4ヶ所より構成され、平面プランは長方形を呈する。北東方向に長軸を持ち、長軸方向はN-47°-Eをさす。短辺2.26mと南西辺2.2mである。長辺は南東辺3.35m、北西辺3.5mで北西辺が15cmほど長く、その結果平面形が歪む。ピットの深さは12cmから32cmまでとばらつきがあるが、30cm前後のものが中心となる。本址の時期を決定し得るだけの資料は得られてはいないが、62号ピットより後期に帰属すると思われる定角磨製石斧が出土している。

3. 土壌

土壌は試掘部分を含めると8基の確認がなされている。この他にも土壌らしきものが試掘部分



第9図 検出された代表的な土壙 (1/40)

に数基確認されている。土壙とピットの判別は平面規模、深さの相関関係により可能で、今回土壙と認識したものは、口径が大きく浅いものという概念を基本とした。

1・5・6号土壙は内部に礫を伴うものである。1・6号は所謂集石土壙に属しており、内部に礫を充填している。礫は単に内部に投げ込まれた状況ではなく、ある程度平坦な面を重ねるように積んでいるものもあり、特に1号は底面に至るにつれ、大きめの礫を敷くように配する傾向が窺えた。縄文時代前期末の土器片が1・5・6・8号より出土しており、土壙の大半は前期末に帰属するものであろう。

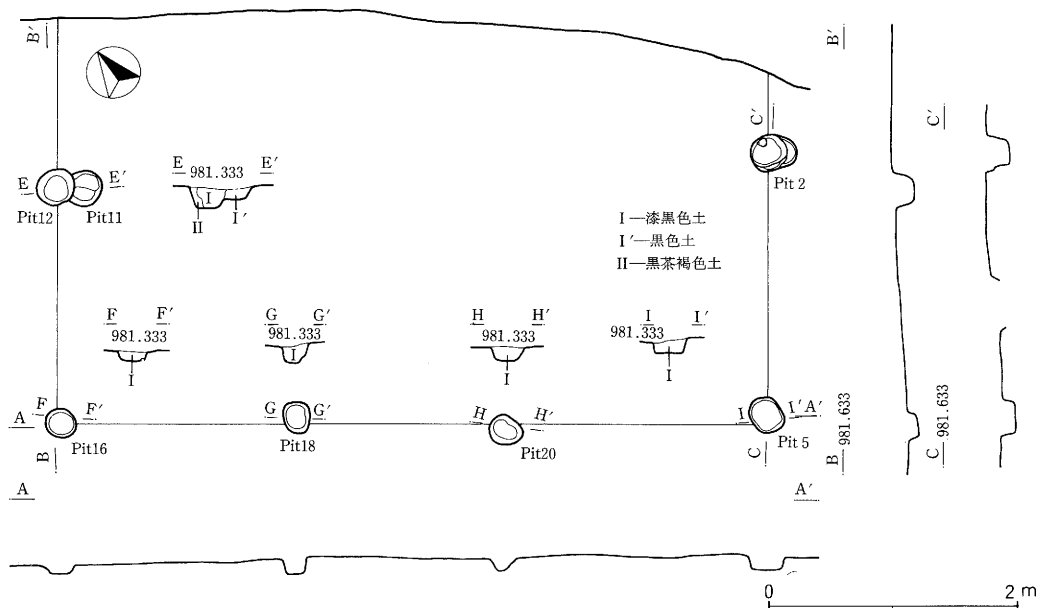
4. 建物址

ピット状遺構と混在する形で検出されたが、他のものよりも規格が小さく、覆土も粘性のある漆黒色土が充填している一群で、その規格等より建物址と認定した。

第1号建物址(第10図) 調査区の西側隅に1号・2号・3号方形柱穴列と重複関係を持ち検出された。遺構の約半分は調査区外となる。検出された柱穴は6ヶ所でその内1ヶ所は立替えによると思われる重複を持つ。建物規模の全容が不明確なために桁行、梁行を把握することはできなかったが、柱穴の配列を考慮すると桁行3間、梁行2間の掘建柱建物址を想定することができる。南西辺を桁行と捉えると棟方向はN-54°-Wをさす。柱穴間の距離は16-18 1.8m、18-20 1.65m、20-5 2.05m、12-16 1.9m、2-5 2.1mと桁行方向の方がやや短い。桁方向の柱穴配列にはややばらつきがみられ歪む構造を持つ。柱穴の深さは概して浅く平均すると約11cmである。本址の時期を明確にできるような遺物は柱穴内より出土していないが、建物址範囲より黒色土器片が出土しており、この遺物を本址に伴うものとする本址は平安時代に帰属しよう。

5. 遺構の時期別分布について

今回の調査で確認された遺構は縄文時代前期末、後期前半、平安時代の各時期のものである。



第10図 第1号建物址 (1/60)

面的に調査できた部分は少なかったが、縄文時代の遺構の分布をみた場合ある程度のまとまりを看取できた。

縄文時代前期末 3号住居址を中心に集石土壌が散在しながらある程度のブロックを形成する。遺構の分布等より考えると、大きく広がる可能性は少なく、小さなブロックが点在する形を取るものであろう。蓮井沢川を挟んで対峙する矢ノ口遺跡で同時期の遺物が採集され、また、若干離れるが高風呂遺跡でも前期末の集落が検出されており、前期末の集落がこの周辺に固まって群を構成していたことが窺える。

縄文時代後期前半 上ノ段遺跡を代表する時期は後期、晩期である。今回の調査に於いて晩期の遺構・遺物を検出することはできなかったが、後期前半に帰属すると思われる柄鏡形住居址と方形柱穴列群が検出された。これらの分布をみた場合、ピット群は（方形柱穴列を含む）柄鏡形住居を挟んで2群より構成されており、特に調査区の蓮井沢川斜面に帯状をなして分布し、調査区南西側の試掘調査区より確認された4・7号住居址（試掘の際覆土中より後期粗製土器片が若干出土している）に連なるような形を呈する。

方形柱穴列が重複関係を持つことなどより、後期の集落は2期以上に分けることが可能であるが、今回の調査ではこれを裏付けるようなデータは得られてはいない。しかし、少量ながら得られた後期土器片より推論すると、堀之内I式期からII式期にかけてこれらの遺構が営まれた可能性が強い。宮坂英弐氏の調査により得られたような後期後半から晩期に亘る遺物は今回の調査範囲では検出されていない。

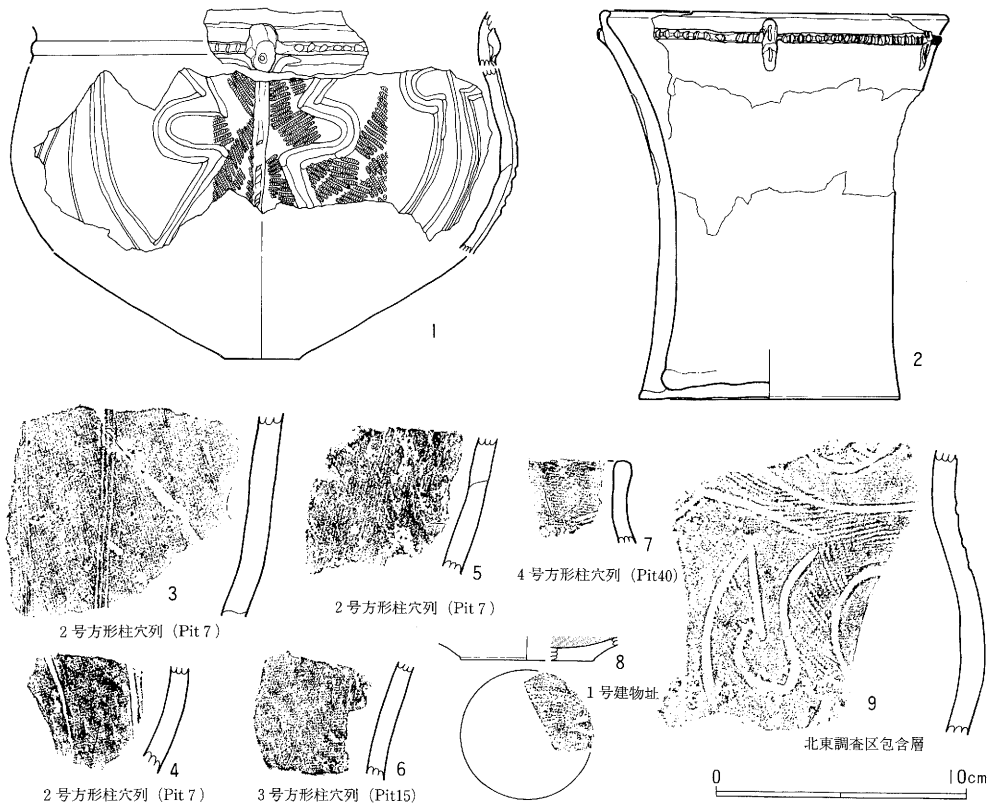
上ノ段遺跡における後期から晩期の遺物分布をみると、宮坂英弐氏の調査した扇端部では後期

後半から晩期の遺物が主流を占め、今回の調査区（扇状地の上部）では後期前半のものしか検出されなかった。これらを考え合わせると時期により集落占地が変遷していることが窺え、扇状地上部から扇端部へという動きを捉えることができようか。

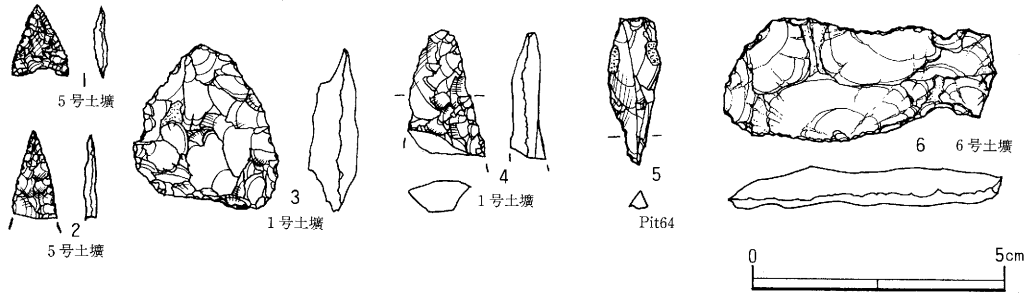
第3節 発掘された遺物

1. 遺物の概要 今回の調査により得られた資料は遺物が多量に採集できるというイメージのある上ノ段遺跡としては少量であり、縄文時代前期末、後期前半の土器片、黒曜石剥片、平安時代土師器が若干得られただけである。

1. 土器（第11図） ページ数の関係よりその全てを上げることはできない。1：試掘調査の際に3号土壇上面より検出されたものである。所謂金魚鉢形の器形を呈し、同部を沈線と垂下隆帯により分割した後縄文を充填している。後期堀之内I式とみられる。2：6号住居址覆土より検出されたものである。口縁部が広がるコップ形の器形を呈する。口縁部に1条の刻みを持つ隆帯が巡り、8字形の垂下隆帯が5単位貼付される。帯縄文が施文されていたと思われる部分は剥落しており、その状況は人為的にも見える。文様構成等より後期堀之内II式とみられる。



第11図 出土土器 (1/3) (1は1/6)



第12図 出土石器 (1/1.5)

2. 石器 (第12図) 今回の調査で検出された石器および黒曜石剥片等は概して少なく、石器はその大半が縄文時代前期末の遺構に帰属するものである。

第IV章 結 語

上ノ段遺跡は、縄文時代後期から晩期にかけて中部高地に於ける代表的な遺跡である。今回史跡境界に接するように圃場整備事業が実施され、遺跡が指定範囲外まで延びることが確認され、構造物設置の位置以外は、遺跡の重要性を鑑み関係機関の努力により埋没保存されることとなったことは一つの成果である。

今回の調査で検出された遺物は少量であったが、市域に於いては初見知である柄鏡形住居址の検出、これを取り囲むように方形柱穴列が検出され、後期集落を考える上に貴重な資料を提示している。得られた資料より類推すると、後期前半の集落が蓮井沢川沿いの緩斜面に帯状の広がりを持ち展開することが窺えた。面的に調査された部分が狭く集落の全体形については類推の域を脱しえないが、検出された柄鏡形住居址、方形柱穴列の組合せを考慮すると、かなり規模の大きな集落を想定でき、後期集落の稀薄な八ヶ岳山麓にあって貴重な資料であるといえよう。また、晩期の遺物が検出されなかったことなどより、時期による集落占地の差を看取ることができ、本遺跡が連綿と拠点的な集落の役割を果たしていることが窺え、本遺跡の立地などを踏まえると、従来論考されているように、八ヶ岳山麓から東信地区へ通じる交通の要衝であったことが考えられる。

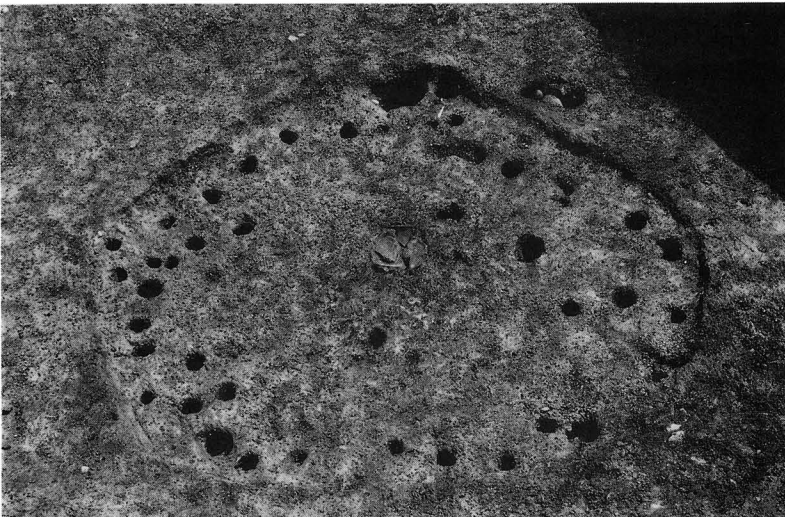
柄鏡形住居址の問題、遺跡立地の問題等について詳細に分析することはできなかったが、今回の調査に於いて本遺跡が複雑な内容を持ち、貴重で様々な資料を内包していることを改めて認識することができた。



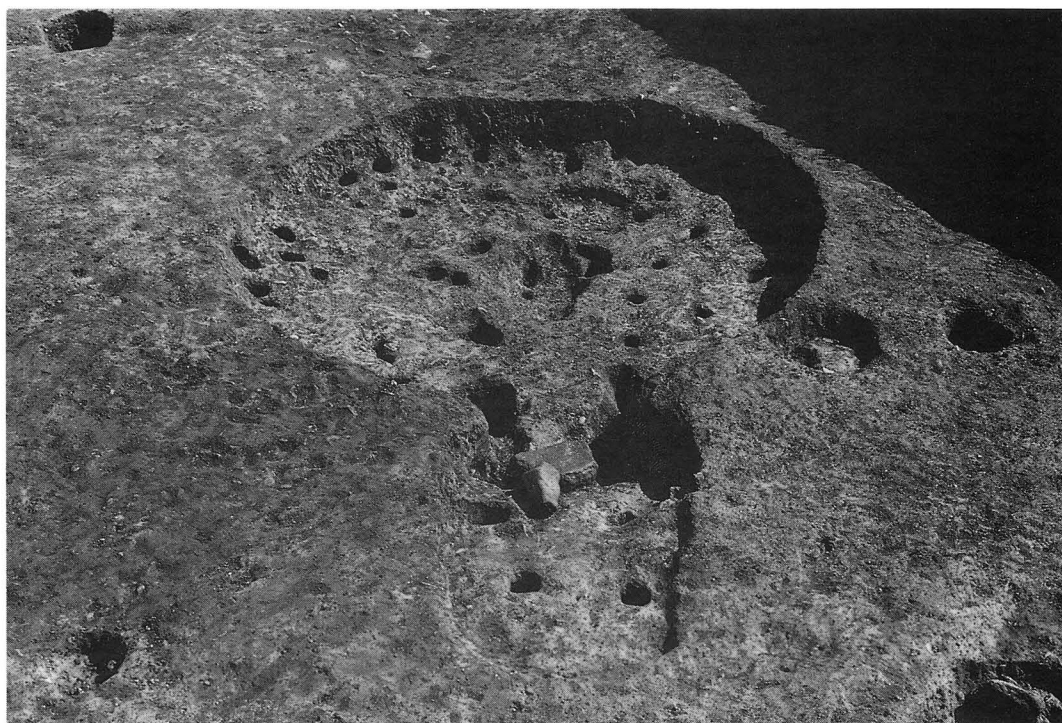
◀ 調査区遠景（南より）



◀ 調査区全景（西より）



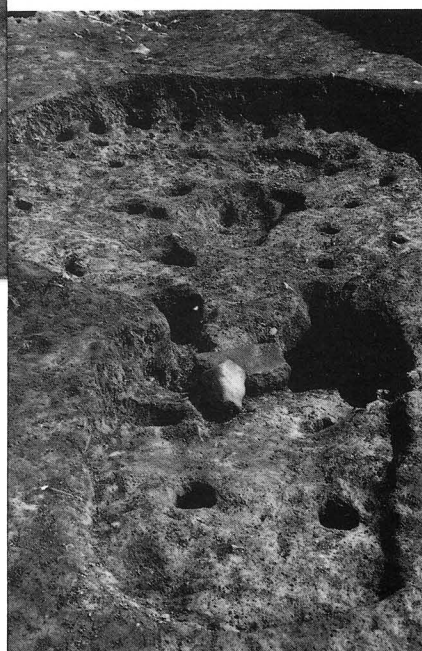
◀ 第3号住居址（西より）



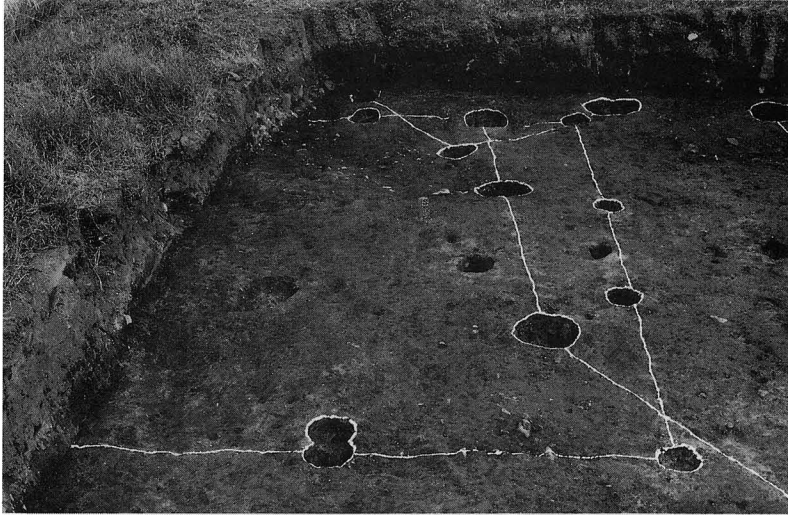
▲ 第6号住居址（南西より）



▲ 第6号住居址覆土内の礫



第6号住居址柄部より主体部をのぞむ ▶



◀ 1号～3号方形柱穴列
1号建物址の重複状況



◀ 豪雨の後の
水の汲み出し作業



◀ 発掘区全景をバックに
記念写真

上ノ段遺跡

平成3年度県営圃場整備事業柏原地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成4年3月20日 印刷
平成4年3月24日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会
印刷 ほおずき書籍株式会社
